

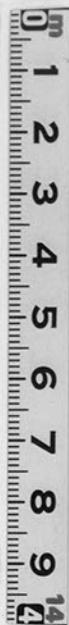
縣人機關誌

福島春秋

第一卷
第一號

東京 福島縣人會 發行

昭和四年七月五日印刷
昭和四年七月十日發行
(每月一回發行)



祝 創 刊

迅く

美しく

低廉に

多くの人へ

有賀寫真館

館主 有賀 虎五郎

京橋區出雲町三
電話銀座(57)一五六三

新宿出張所

四谷新宿三ノ五
電話四谷(30)二五五一

技即禪之れが私の標語であります

縣人の御方には特に御便宜を!!

祝 創 刊

中島元次郎



第一卷創刊號目次

△「福島春秋」の使命……………發起人

△卷頭言……………梧桐生(1)

◆愛と汗……………蓮沼門三(2)

——大誓願の確立——明るき世界の建設——よろこびの世界——
——人の本性——愛なき人生は暗黒なり——

△捨石こなるまで……………代議士 栗山博(9)

△發刊を祝して……………渡邊武男(12)

△靜かな生への精進……………代議士 金澤安之助(13)

△選まれた私の使命……………代議士 石射文五郎(15)

△歸郷……………岩平生(16)

△現實に即して理想へ……………(東白川郡) 吾朗生(17)

△郷土史蹟便り(會津之卷)……………編輯部(19)

◆美談縣人の誇り……………一記者(20)

堀切善次郎氏 佐藤盛二氏 佐藤宗三郎氏
菅野利雄氏 上石留五郎氏 上野貢氏

△郷土通信……………信夫山放送局(24)

△福島縣市町村會議員(一)……………(27)

△戀慕の人質……………矢間忠良(29)

△夏の夢三題……………柳緑花紅(31)

△科學欄……………(33)

——小さい科學——酒と病氣——動物の冬眠——世界最大の蓄音機——
——油蟲と介殼蟲の驅除法——石油乳劑の作り方と使用法——

△福島縣人會々則……………(35)

△編輯後記……………(36)



▲「福島春秋」の使命

全國の福島縣人團結せよ!!!。

團結は力なり。そは明治、大正の異數的薩長人の活躍が雄辯に物語てゐる。故に吾人は昭和維新に際して雄飛を期せんとする福島縣人の團結を切實に感ずると共に其を強調する者である。團結せよ福島縣人!!!。以て眞摯と至誠とに一貫する福島縣人の昭和維新に於ける飛躍を試み様ではないか。其れ郷土! 郷黨! 之れを愛し然して懷しむは人間至情の發露である。

人、誰か自己搖籃の地を愛し慕はざる者あらんや。

祖先墳墓の地として吾れを育くみ、吾れを慈しみたる故郷の山川を顧る時、人各々望郷の思出は盡きぬであらう。其れ祖先を尊び故山を愛しそが譽れを誇るは止むに止まれぬ人性の發露である。靜かに更け行く夜! 鷄鳴の訪れる朝! 遠く異郷にありて故郷を想ひ、故山にありて遙かに異郷にある朋友知人を思ふもまた此情あらばこそ。然らば、我等は斯く叫ばん、全國に冠絶せる幾多の歴史を有する我等福島縣人の存在を天下に示し地下に眠れる幾多尊き先輩、祖先が幾多の歲月と血と涙とを以て織りなせる史蹟を尊重し、現代科學の許す範圍内に於て慣習、風俗を尊び傳統を容れ、然して來るべき時代に奮闘すべき後進に其の生長の機を與ひ、彼等の前途を開拓すること、我等福島現代人の責務にはあらずや。此處に於て、吾人感ずる處あり、微軀を提げて大福島の大旗を翻へし、月刊誌「福島春秋」を發刊する所以のものは一ツには縣人の一致團結を促進すると共に其の外にあると、内にあるとを問はず、共存、共榮の大連鎖を作り以て「福島スピリット」の發揚を期し我が福島縣の爲に微力を致さんとするに他ならない。斯くしてより善き縣人、より善き淨土福島を完成し更

に國家社會の利福の爲に、福島の人材を育くまんとする維れ吾等此度「福島春秋」創刊の心願であり理想である。

乞ふ吾等と志しを同ふする士共に携へて事に當り其の志望を達成せしめられんことを。

我觀

◎諺に「道は近きにある」と即ち先づ一郷を渾然たる珠玉として以て一面邦家の一要因をなさんのみ。

◎百花、燎亂研を競ふとは之れ各府縣に於ける郷土雜誌の出現である、然るに東北の關門と唱れ囊に寛政の治に參與して名聲を恣しいま、に致たる白河樂翁を出し近くは明治、大正の大政治家河野盤州翁を産むだ我が福島に之れなきを吾人の遺憾とする處此處に於て我等淺學、菲才を省みず郷土機關誌として「福島春秋」を創刊したる所以である。

福島春秋創刊發起人

鈴木 寛 安 福 一
吉 田 多 桐
金 澤 砥 梧
青 砥 本 所 在 地

本所 福相生町五ノ三八
電話 本所 三、四七四番

◎本社顧問

代議士 八田 宗吉
代議士 蓮沼 門三
代議士 菅村 太事
代議士 石射 文五郎
代議士 金澤 安之助
代議士 比佐 昌平
代議士 林 平馬
前代議士 大島 要三

◎本社賛助員

村島 文亮
高木 松吉
渡邊 武雄
佐藤 芳敏
山田 廣治
西郷 半藏
吉田 國之進
鈴木 昇

祝 創 刊

親切なる

品を

安く賣る

事に

最も

熱心なる

—— 神田へ御出掛の節は

是非御批判を ——

ミハル 正靴店 札

神田區小川町通中央

電話神田一三五五番

東京府瀧野川町一〇六八

卸部 電話王子七一九番

振替東京七二五二六



言 頭 卷

道は近きに有り。是れを陳腐なりと一笑する勿れ。之れを笑ふものは宛も等邊三角形の内角の和は二直角に等しいと謂ふを否と云に同じ。メートルリンクの作にペリヤとメリサンダと云ふのがある。此のペリヤとメリサンダの二人の乙女は眞理を探す爲めに遠い旅に出様と其の父に願ふのである。

する父は「何んで遠い旅に行かうとするのだ眞理は遠い旅にあるのでなく却てお前達の足下にあるではないか」と教へ諭したのであつた。誰もが皆彼等二人の乙女の様に遠い旅に憧れの眼を放て其處にのみ光を見出さうとする。そして其の足下にある幸福や其の身邊にある光なともすれば忘れ勝である。理想を持ち抱き憧れの心を持つのはより宜しい。否若人には必ずその心がなければならぬ。だから云て遠きに旅し漂ふ必要は毫もない私等は人生の意味も亦斯如きものであらうと思ふ。總ての所に意味はある野邊に咲く名も無き草木にも美しき花は興へられてゐるしその花はソロモンの榮草の極みだに及ばぬ輝と誇りを持ってゐる斯様に周圍に興へられて居る意味を見出したことこそ其處に創造があるのである。

創造とは人の流行を逐ふのでなく又漂泊したり流浪するでもない足下に自己自らが意味を探し求める意義である。

今や昭和維新は成されんとするゐる創造の時代なる昭和四年も今や半である我等に興へられたる所を持って此の上なき淨土として我等の仕事を楽しみ我等の存在を賞玩し様ではないか諸君其の意氣と其の力を以て自己の使命を遂行し様ではないか。青年よ來れ。(椿桐生)



愛と汗

蓮沼門三

古へ、ペルシャのダリオスの子クセルクセスが、丘の上から勝ち誇れる己が軍勢を瞰下して、さめざめと熱涙を流したことがあります。

従者が之を怪しんで『何故泣かれるのか』と問ひました。クセルクセスが答へまして、『旌旗は風に翻り、劍戟は旭に映じてゐる。百萬の貔貅、意氣堂々として、實に天地を呑むの壯觀である。』

さりながら、此百萬の勇士が百年の後には、地上に一つの影をも止めぬであらう。

人を斃し、城を奪ひ、血の河を流し、骨の山を積み、勝利の祝杯を擧ぐる自分も、何事ぞか此世に残す。勝つも負けるも、畢竟無意義の戯れに過ぎない。誠に淺果なことをしたものだ。』と、再び涙を拭うたといふことであります。

私利私慾に囚はれ、自己一身と、自己に屬する小範圍の榮華を得たい迷から、多くの同胞を虐げ苦しめた英雄の末路は、實に悲惨なものであります。

貴き生命を此世に享けた人間が、誰か無意義に一生を送りたいと願ひませうか。

泣きたい者、呪ひたい者は唯の一人もありません。凡てが感謝して暮りたいのです。皆人が笑つて樂しまたいのであります。

唯、その念願が大ならず、その本性が曇れるために、笑ひたいと願ひながらも涙に浸り、感謝したいと願ひながらも呪ひたくなり、かくて互に肉も靈も亡び行くのであります。

歐洲全土を席捲したナポレオンが、ワテールローの一戦に敗れて壯圖成らず、セントヘレナに幽閉せ

られてからは、散歩する區域さへ限られて、悶々の情抑へ難く、晩鴉のねぐらに歸るのを見て、『ああ、我れナザレの大王の子にも若かりき』と嘆いたと申すことであります。

北越に蟠踞して、勢威四方に振つた上杉謙信も、『四十九年醉夢の中、一生の榮華一杯の酒』と歌つて、四十九歳を末期として墓へ歸つたのであります。

徒らに富貴權勢に憧れて、世上を騒がした群雄の終焉を見ると、どの人も自分の辿り來た過去を顧みては『本當に無意義な一生を送つた』と、悔恨の涙に濡れないものはないのであります。

『百の寺を建つるよりも、一人の人を生かすに若かず』功名の爲め百の寺を建てた處で何の價値もなく人を慰め人を勵ましつつ、明るき世界の建設に努力することが、人間最大の事業であり、價値ある人生であります。

『一人の憂を去り得なば、一人の悩みを醫し得なば弱し鳥の一羽をば、助けて其巢に歸し得ば、我が生活は無駄ならず』と、眞に味ふべき歌であります。

大誓願の確立

『人は心程の世を経る』と申します。

大いなる願ひ、聖き願ひを有する人のみが、大いなる世、聖なる世を経ることが出来るのであります。小さな願ひ、卑しい願ひ、邪な願ひを持つ人が、どうして此世を大きく尊く清く送ることが出来ませう。

賢い哲人、悟つた聖者は、一人の例外もなく、凡て大願を立て、それを見つめて前進又突進されたのであります。あらゆる迫害と、艱難と缺乏とに悩みながらも、歡喜に躍り上り、法悦に勇み立ち、涙と血とを彩りつつ戦はれたのであります。

愚な我々も、及ばぬ迄も正しき足跡を慕うて、大誓願を確立し、眞理と信する處、最善と信する處に向て側目も振らず一直線に突進したいものであります。

暗夜に歩めばこそ、藪の中にも迷ひ入り、溝の中にも落込み、馬糞も芳花も無遠慮に踏躐るのであります。

團々たる明月雲を破つて地上を照らす時、行べき道は照らされ、着くべき港は見えて参ります。誘惑に陥つたり、途中で挫けたりするのは、大願が確立せぬからであります。大誓願が確立して、始めて懸命の大活動となり、懸命の活動が生命ある事業の成

功となるのであります。

立志とは大誓願の確立の事であり、志立つて始めて、迷ふことなく疑ふことなく全心全意を捧げて、精進することが出来るのであります。

明るき世界の建設

意義ある人生を送り、永遠の生命を得んとする者は、どうしても大誓願を確立しなければなりません。吾人の大誓願は、明るき世界の建設であります。

明るき世界とは、總親和總努力の善風が作興する環境を指すので、吾が住む郷土に一人の争ふ者もなく、一人の怠る者もなく、總ての人が親しみ合ひ、總ての人が働き合ふ社會を謂ふのであります。

老いたる者も幼き者も、自分の力のあらん限り、半人分でも四半人分でも働くべきであり、病む者は床の上で悩みながら健康な人の爲めに祈り、富める者も、貴き者も、其心を勞し、其の身を起して必ず職分に勉むべきであります。

徒食するは天下の公盜であり、人の制裁は免れ得ても、神の制裁を免れることは出来ませぬ。百丈山

神様の外知るものはありませぬ。吾々は、出来ぬからとて止むべきでなく、理想の光明を仰ぎつつ、一步步々進まねばならぬのであります。

之を實現するには、先覺者が経験せられた様に、血と涙の奮闘を続けなければなりません。第三者から見れば、何だか馬鹿氣たやうに思はれませうが、自分としては此の誓願に向つて苦闘することが大満足であり、大歡喜であり、丈夫としての本懐であるのであります。

よろこびの世界

明るい世界は、又歡びの世界であります。

『總親和總努力』の誓願によつて、強き者は弱き者を助け、賢き者は愚な者を導き、富む者は貧しき者に施し、貴き者は賤しき者を恤み、老いたる者を敬ひ幼き者を愛し、悩める者を慰め、驕る事なく、蔑むことなく、凡ての人が天賦の能力を伸べ得るやう、天授の使命を遂げ得るやう、斯くて全體の圓滿完全の活動によりて、總能率の増進となり、總幸福總向上の達成となつて、歡びの世界が展開するのであります。

世人稍もすれば幸福の眞義を間違へることがあり

の大智禪師は『一日作さざれば一日食はず』と教へられました。

佛教信者が耶蘇教信者と反目したり、政友會員が憲政會員を敵視したり、學閥、門閥、財閥互に結び合ふて他を排斥したり、資本家と勞働者とが軌轢したりする事は、皆暗黒世界を實現する原因であります。

天子の赤子七千萬人は、凡て赤き心清き心を以て親しみ合はねばならぬのであります。如何に兄は富み弟は賢くも、互に呪ひ合ひ争ひ合つては、父母の心を慰め得ぬと同様に、國民互に背き合ひ争ひ合ふては、大君の御心を安んじ奉ることが叶はぬのであります。

大君の御眼から御覺になれば、七千萬の臣子が悉く可愛いのであります。私共は、政黨、政派、地位も、年齢も、一切を超越して、總ての同胞と親しみ合ひ、働き合つて、國家の總能率を増進するやう、念願せずには居られぬのであります。

『一人争ふものなく、一人の怠る者もないといふ社會は、事實に於て出来得べからざることだ』と申す方もありますが、出来る出来ないは、天なり命なり、

ます。それ故、幸福を願ひ乍ら不幸に泣き、喜びを求めて悲しむやうになります。

幸と云ふ事は、衣食住が足ることであり、名譽權勢を恣にすることであるかのやうに思ふ人もありますが、そこに大きな誤りがあるのであります。

幸と云ふのは。大和言葉で云へば『咲き延び』でより美はしき花が咲き、より良き實を結んで、新しい生命が延びることあります。

咲き延びないならば、幸ひではなく、之は『萎え、亡び』であります。遊んで徒食する人は、血液の循環が鈍つて肉體の衰弱を招きます。

金殿玉樓に住み、珍味佳肴に飽きながら遊び暮らすのは、大層幸福のやうに思はれますが、『富限者の三代目は亡びる』譬の如く、働かぬ者の末路は必ず亡びるものであります。

人を虐げ人を泣かせて、名譽權勢を獲得しても、良心の苛責と怨靈の祟りは、元氣の喪失となり懊惱煩悶となつて、之又亡びざるを得ぬのであります。心身の萎微衰亡は、幸ではなく不幸であります。咲き延びるには、必ず楽しみが伴はねばなりません。

『樂し』と云ふのは、『手伸し』のことで、心廣く體
肝なる時のみ、吾々の手は伸びるものであります。
酒池肉林の歡樂など云ふて、酒を飲んだり妓を呼ん
だりして、浩然の氣を養ふなど申す人もありますが、
我國の樂しの眞義は、支那の所謂歡樂の意義とは、
非常に違ふのであります。

酒色による歡樂は、必ず哀愁が伴ひ、財布叩いて
妻子を泣かせた時、常道を脱して親に意見された時、
他人に其醜體を見られた時、決して心廣く體肝かに
ならず、却つて手が屈むのであります。

眞の樂しみは、如何なる時に於ても、春風に吹か
れながら、花の香に浸るやうな豊かな氣分で、手が
伸び／＼するものであります。之が浩然の氣であり、
この樂しの境涯に立つて始めて咲き延び、眞の幸福
を享けて永遠の生命が得らるるのであります。

人の本性

『天の命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ふ』と
中庸に記るされてあります。

人は、その本性に従うて道を行ふ時のみ、本當の樂

ゝに動くことが道であります。

本性の輝きは、先づ目に現はれて慈眼となり、慈
眼を以て子供を見る、見るだけでは満足出來ず、口
に現はれて『坊や』の愛語となり、愛語でも満足出
來ず、更に接吻となるのであります。

慈眼愛語から進み出づる生靈が、子供の全身全靈
に注がれた時、子供の心靈は活躍し、肉體は肥ります
そして云ひ知れぬ喜の内に育ち行くのであります。
本性即ち明魂からは、活かす靈が放射され、活か
す靈は一切のものを愛育するのであります。

本性が曇つて暗魂となれば、殺す靈が放射されて、
一切のものを呪ひ殺すのであります。暗魂は、殘忍
となり、怠惰となり、斯くて人を虐げ人を泣かせて
共に亡び、明魂は慈愛となり、勤勉となり、かくて
人を祝し人を慰めて、共に榮えるのであります。

愛なき人生は暗黒なり

私の友人が長々病床に呻吟しましたが、肺結核と
云ふことが判ると、友人は妻が看護のために近づく
ことを非常に嫌がつたのであります。

何故嫌やがるかと云ふと、自分は死を覺悟しなが

しみを感得する事が出来るので之以外にはどうして
も手伸しの境涯に立つことは出來ぬのであります。

それでは本性とは何か、道とは何かと云ふと、之
は天が萬人に與へられた所の『愛したい』愛する人
のために、『働きたい』との至情であります。

即ち『愛したい』の心情は人の本性であつて、吾
々が人様を見る毎に、懐しいと思ふのは、此本性が
現はれたのであつて、何だか、いけずか、いと思ふの
は慾念や感情の暗雲によつて、本性が掩はれてゐる
からであります。

本性が現はれたら、どの人を見ても懐しい、そし
て其人のために働かすにゐられぬのであります。こ
の時こそ、私共は本當の樂しみを感得することが出
來るのであります。

聖者賢人が、誤解せられ、迫害せられ、窮乏艱難
に悩みながらも、他人の知らぬ法悦と感謝とを有つ
所以は、唯本性に従つて動くためであります。

母親が、自分の子供に對しては、本當に愛したく
てたまらない、子供のためなら身を粉にしても働き
たくなる、之が本性の發露であります。其本性のま

らも、子供だけは健全に育てたい、それには妻を健
康にして置かねばならない。それだから妻に迄傳染
させてはならぬと恐れたからであります。

處が妻君は、夫を愛したくて堪らない。本性の發露
は身も心も捧げて看病せずに居られぬのであります。
夫の爲なら、命も惜からず、一生懸命で介抱する事
が本當であり、どんな苦勞も厭ふ所でありませぬ。疲
勞したり厭になるのは、愛が足らぬからであります。
本當の愛から發露した努力は、勞すれば勞する程、
満足となり喜びとなるのであります。

此妻君は、か弱い身體でありながら、夫のために
寒中垢離を取りつゝ、跣足で百度參りをしました。
一心不亂の神詣でに、足は傷つきて血が流れて居り
ます。眞剣になれば、餓えも凍えも苦しみも怖ろし
さも、凡てを忘れるものであります。

愛は勇氣を生み、奮闘を生みます。獅子に組みつ
いた母親もあります。

かくまでに夫を熱愛するのに、夫から遠ざけられ
厭やがられるのは、『自分に傳染させまい』との夫の遠
慮からだ』と氣付き、之は一つ自分の決心を示さね

ばならぬと考へました。

恰度、夫が血痰を吐いた壺を枕頭に置きましたから、妻君が近よつて之を見つめて居りました。夫が手を振つて『室外に去れ』と諭すのも肯かす痰壺を握りました。夫の瞋ら立つのも氣に止めず、壺を引き取る手も見せず、血痰を飲み下したのであります。そして驚き呻く夫の顔を、涙ながらに見つめました。夫は茫然自失、何とも云ひ知れぬ悲哀の中に、熱涙を絞りながら、妻の手を固く握つたのであります。咽び泣いた夫は、漸く我に歸り、『お前は共に死ぬ氣か』妻君は『一緒に死に度いのです』とさめざめと泣き崩れました。

夫は妻君を拜み乍ら『それ程の覺悟なら、どうか付き添て看病してくれ、不幸の境遇を怨んでくれるな』と感謝の涙と、歎びの涙とに浸されたのであります。『涙より涙に通ふ心こそ、神にも通ふ心なるらめ』同情の涙と感謝の涙と通ひ合ふ時が、神の心にも通ふ境地であります。此の境地を味ひ得た者が、人間としての成功者であります。富巨萬を積み、位人臣を極めても、この境地を味ひ得ぬ人は、人間として

の失敗者であります。

不思議なことには、其妻君が血痰を吞みながら、病氣も傳染もせず、そればかりでなく、誠心こめた妻の看病が、夫の慰めとなり喜びとなり、手伸しの心が第一の藥となつて、終に病は全快したのであります。百藥中、慈眼愛語にまさる慈藥はありません。愛心は人の心を明にし、人の心を安らかにし、人の血液を温かにし、人の細胞を活躍させます。病者も起ち、愚者も賢く、癡人も跳り上ります。

斯て暗黒界は光明界に變轉し一切の悲哀怨恨争闘の迷雲晴て、一家も一郷も明るくなるのであります。之に反して、瞋眼毒語は人の心を斬り、人の魂を怖かせ、人の血を凍らせます。

『愛は人の惡を思はず、よく忍びよく遷り、よく人の足らざるを補ふ』愛なき人生は暗黒であります。故に諸君吾人は互ひに心の扉を開いて各自の靈と靈との接觸を計り以て一層の信と愛とを培ひ社會の幸福と共榮に、體に汗し心に鞭たぬ。

新らしく生れた福島春秋の健全なる發達を祈るとともに彌榮へんことを。

捨石となるまで

代議士 栗山博

美しい一輪の花が咲き出るにも。熟れたあの秋の獲入れを喜ぶ農夫の笑顔にも其迄には幾多の忍辱と多くの努力を費した事であらう。人が輿論なり勢を利して社會に鼓腹擊壤の樂土を見出さんとするにも何等其處に距りはない。美しい花が開くにしても肥料といふ穩れた捨石があり、季節といふ輿論に導かれて然かなるのである。貴きものよ捨石。強きものよ輿論。汝は團結を作り社會の福利を増進せしむる。『輿論と謂ふものは可度谷間に落ちる石音の様なもので、始めは一つの石が轉るのだが其れが途中から他の砂礫や石塊を伴ふて、あの一大音響となるのである』其れと等しく世の中の評や時代の輿論と謂ふものも一人の偉人なり、理想家なりがある信念の下に其の抱負なり思想を強く社會的に呼びかけると、

多くの人を求引して、其れが社會的一つの勢ひとなつて世の中を動かすのである。此れは實に古往今來動かすべからざる勢ひに對する真理である。

私は此の大きな一つの石が即ち轉て側の多くの砂礫を求引する力を現代の多くの人が喝望して己まなう様に思はれる、其れ程社會は團体的に動かんとして居るのである。あゝ其の結合團結が如何に大きな音となり、社會に力を致したかと謂ふ事は皆様が己に御存じの事と思はれる。

扱て此の大きな音……世の中を導く勢、世論と云ふものは社會の福利増進の上に如何に必要であるか然して有要であるか斯くして求むる其の鋭角的な力の如何に地方的開發と地方人の中央進出に益するか其れに伴ふ犠牲と、省みられざる捨石が如何に其の

團結や世論やを構成するに就て如何なる役割を演じて居るか述べて見たいと思ふ。

諸君は徳川三百年の榮華の基を作した宗祖家康を祀れる彼の日光廟の燦たる建物を見られたであらうあの輪弁の美、宏大なる建築に唯々驚くのみで其の建物をして不動の地に置く基礎工事の如何を云ふ人の妙きを吾人は甚だ遺憾に思ふものである、然して其の捨石に私は心から一掬の同情を寄するに吝ならざる一人である。

例へば地方的開發から延びては一國の世界的雄飛に致しましても其の一地方や一國に科學文明の美くしい花咲き確實な實りの收穫を期する迄には此の省みられざる多くの捨石のあつた事を私共は深く考へたいと思ふ、此の捨石になる事を人は好みません。其れは捨石の多くが社會的に省みられず一時は反對の批評に置かれる場合が多いからである。

進むで此の捨石にならうと云ふ人は餘程の熱情家若しくは憂國の士とか申すので犠牲といふ人性の本能に逆つて生きると云ふ大きな不生産的消費が伴ふからであります。

に生きた事よ。其れ光輝燦として史上に映する、明治維新大政奉還に力を致した木戸、大久保、西郷等の努力専政々治から今日の時代を作り出した彼等の血貴いかなと云はねばならぬ。社會のために、民衆のためにと謂ふ大きな理想の下に動いたのであるが其の抜く能はざる牢固たる信念は不知のあいだに現在の様な閥を作り上げて終た。

彼の明治維新の大業も決して薩摩や長州等の力のみで成たものではありません、然し一番團体的に働いたのは彼等だつたのです。然して彼等の大きな動きが部分的な力を吸入してあの様な大きな仕事をしてのけたと云ふ結果になつたのである。其の一主力的な動きが小さい部分的な力を集めて一ツの大きな世論なり勢と云ふ力を作つて、部分的な小さい力では作し得なかつた大きな一ツの仕事を作り上げたのである。斯の様な努力は即ち團結せねばならぬ。然らば爲し能はぬ事も作るであらうと、心に燃ゆる彼等の強い信念が左様な結果を生んだのである。斯様に考へ來るとき私はます／＼此の團結の力と云ふものを要求して己まないものである。

宗教の爲めに自ら捨石になつて將來に生きた日連維新當時の西郷、木戸、大久保等は實に自ら進んで當時の捨石になつたのである、其れが時代々々の大きな仕事を造つてのけた。然し西郷や日連が如何に偉大でも決してあれ丈の仕事は出來得ない、蔭に大きな力の存在して居た事を見逃してはならない。之れが即ち眞實に省みられざる捨石である、大きな捨石に無數な捨石が集つて大きな社會的な力となつたのである。故に團結は力なりと云て現代の多くの勞働團體が盛んに團結し以て社會的進出を遂げんと力を致して居るのである。斯くした尖鋭的な力を團結なり結合は其の圓の中に含むからなのである。彼の薩長、土、の今日社會的否日本的に抜くべからざる力を凡ゆる方面に扶殖しつゝあるは此の團結と云ふ、即ち共に手を取つて生き様と云ふ長いあいだの彼等の幾多先輩の血と努力の結晶が、今日の力を生むたのである。嗚呼貴むべき先驅者の血と涙と其の努力よ。

されど其の當時の様々なる社會あるひは方々よりの批難攻撃、四面楚歌の中にあつてよく將來の理想

諸君！諸君はよろしく此の光ある捨石となるともに進んで互ひに手を取る事を忘れず、大きく我が縣人の中央進出、否世界的進出を期そうではないか。故に大を致さんとせばよろしく閥を作り、團結せよ。

其れは血は水よりも濃いからである。

▽人　　人

人の此世に相逢ふや、恰も船の海上に相逢ふが如し、相逢ふは唯だ是れ瞬刻の間、一たび去れば大海茫茫、復見るべからず、舟々相呼ぶは瞬刻の間に於てせざるべからず、左れば我等も人に對する毎に常に之を祝し、若し必要あらば、互ひに助力を與へざるべからず。



發刊を祝して

渡邊武男

今度福島春秋同人が團結、信愛、向上の一機關として『福島春秋』なる月刊雜誌を發行する事になつた、誠に機宜を得た適當なる企てと衷心より賛意を表せざるを得ない、茲に發刊の祝辭に代へ聊か平素の所懐を述べ様と思ふ。

團結なきところに生命なしとは良く言ふ事であるが、眞に至言である。回顧すれば王政維新の大業は薩長土肥の青年の團結力に依つて成し遂げられたと言つても過言ではない、又近くは一九一七年十一月露西亞無産階級革命……それは或る意味に於ては彼の有史以來の重大事件とされ且露獨革命の直接動因たりし世界大戦争よりかも重要性を持つてゐると云ふあの革命も亦無産者の大團結の力に基因してゐる、(制度の善惡は別問題として)團結の力や偉大なりと言はざるを得ない。

由來東北人は概して團結心が乏しい様に思はれるそれには勿論風土の關係もあり其他種々の原因もあらうが先づ第一に住民性の然らしむるものであらうと思ふ、吾々東北人の一大欠點と言ふべきである。此の欠點を補正するにはどうしても各人がお互に自覺して團結、信愛の道を講じなければならぬ、福島春秋が團結の二字を掲記したことは此の意味に於て充分な意義を持つものと思ふ。

從來より縣人俱樂部とか縣人雜報とか數種の機關誌と言ふべきものが發行されてゐるが、其の内容たるや微々たるものであつて吾々の希望を到底満足するに足りぬものであつた。此度發刊された福島春秋こそそれらの不備欠點を補ひ團結、信愛、向上の六字をして眞に意義あらしむる事を望んで止まない。最後に同人諸彦の健闘を祈り創刊の祝辭となす。

靜かな生への精進

代議士 金澤安之助

現代社會生活思潮は凡ゆる意味に於て暴風雨であります。中に漂ふ小舟は如何なる地の港に息ひを求めんとして強く喘へいで居る事でありませう。羅針盤は何地に寄港する事を示して居る事でせうか舟收まらんとすれども風收まらずとは現代の社會現象であります此處に私共は確固たる羅針盤に依て其の理想の實現に邁進致しましてあの波の靜まつた靜かな濱邊の穩かな生活に泌たりたいと思ふのであります。此頃でも偉人になりたいと心懸る少數の他に優れた素質を有する人々には、英雄傳や多くの偉人物語に刺戟を受ける事とそれが非常な參考になるものであります。

亦現在に於て社會的に頭角を現してゐる人、また將來他を凌駕して見たいと思ふ様な人には、過去の史實や様々な傳記物に幾分感謝する所があらうかと

思れる。實際萬人共通の生能を社會人の一人として波瀾の多い、殊に近代は非常に争ひの劇しい舞台に立つて小さいながらも確かりとした生活を打建て様とするには、又如何なる方法に依て手段を用ゆべきかとするには、矢張り吾人に一番接近した一般多數の人々の生活から生れ出た生活現象から之れを探らねばならないと思ひます。名士や有名な學者等の講評も或る程度の參考にはなるが實際が其の多くは眞實の生活と接觸が足りないために、私共や將來社會に立つて強く働かうと思ふ人達には餘り適當な參考として薦める事は如何かと思れる次第であります。

其處で私は規則正しく忠良なる社會分子として此の世に處する第一の條件として自重自愛する事は、物と心の相方に於て必要な事であらうと思はれます。先天的に浮華輕佻な人は極めて前者に就て自省自戒

を必要と致します。

如何なる人でも心の奥で人知れず氣位を高く持つ事は必要であらうと思れます。度を越えない程度に置いて之れは他に勝ち他を排すると云ふのではなくして自分自身をある程度まで強く深く愛するともに、正しく美しく伶俐な生長を遂行する爲めに要する最も大切な事だらうと思ひます。

第二には實力を養ふと謂ふ事でありまふ。未だ充分に智力や体力の發達修養の不足の時に於て自己が何に適當する所の才能や技術を具へて居るか云ふ事は解るものではありません。故に高等小學校更に中學校専門學校等の教育は先づABCのA位の教育程度であると考へて一生懸命に努力する事が必要であります。人に頼らず即ち自習すると云ふ位に努める事が必要だらうと思はれます。實際私等は學校を出さへすればとか肩書とかと思て社會に出て面喰た一人ですから廣くよりも深く強く知る事が必要だらうと思はれます。努める事は戀て自己を社會の優値な立場に置く基と思わねばなりません。

第三の條件としましては獨立心を涵養する事であ

ります。獨立心を強く持して進むで行くと云ふ事は男子は今後の活社會に處する上に於て最も必要であらねばならぬと思ひます。物質的に即ち經濟的に獨立して生きて行く、何んと勇敢な事ではありませんか。人に依ると人間が一人で卑屈になり彈力性のないゴムの様になつて終ひます。然して依頼主義は自己をして無能にする計りでなく他に自己の無智無能を暴露する様になり眞に自己を試すべく此の地上に生じたる眞の使命に反する卑怯者となります。

獨立心の旺盛な人は他に浮和雷同せず誘惑にも打ち勝ち輕々しく言動致しません。故に自然と他から重んぜられる様になり即ち重味と奥床しさを加へて來ます。結局其の人は社會から信用せられ重く用ひられる人になります。

私は此の人生を冒險に送る事を望むとともに其れを調和して行くべきだと思ひます。進め強く然れども道をあやまたず、修養と獨立心の涵養は自己を活社會に送られたる人及び將來社會に飛躍を試みられんとする人々には最もよき試練の坩堝である事を忘れてはなりません。内に蓄ひたる燃ゆる様な尖鋭的な活動力は實社會への心強きスタートを與へる事を忘れてはなりません。

選まれた私の使命

代議士 石 射 文 五 郎

理論から實行へ然して其の反影が直ちに國民生活の上に利福の何物かを齎らすべく努むる事之れが其の政治であり、選まれた政治家としての完き使用であらねばならぬと思はれます。誠に政治は實際であり人間が實生活への秩序と利福への止まれぬ欲求の所産であります。故に生活即政治と謂ふ觀念から離れての政治理想なり理論があり得ないのであります。

私は考へます今日の如く徒らに政治の形式や組織の上に高尚な然して難かしい理論のみ戦はして居りまして其の答に置いて國民生活の上に落着と餘裕とを直接寄與する事が出来ませんでしたならば其の政治理想なり理論なりは大きな誤りであり空想と化し美辭を連ねた一つの章句に過ぎません。然して私共の生活からは甚だ縁遠く何んの關係もなく可度與へ

られた饅頭に餡のないのと等しく私共は淡い失望を感じなければなりません。

それを私は皆さんに選まれた一人として深く此の事實を憂へるのであります。故に私の政治への理想といたしましては全体は部分であり部分は全体であります。部分の完きは戀て全体への完成を爲すのであります。故に地方は國家形成の基礎でありますから地方の利福消長は直ちに國家の福利消長に結び付くのであります。私共は此處で考へなければなりません。

現時の人々は大きい事のみ解決に急いで小さい事柄であると忽にする其の結果多岐亡羊の嘆を聞くのであります。故に私共は理想なり理論なりを實際化するに就きましては先づ小さい處から大きい處に及ぼす事が尤も健實な方法であり卑近な手段であると

思はれます。町度水源が清らかである川は其下流が自ら澄むと等しく辯は求めずして明かであります。故に地方産業交通の開發施設を確立せしむる事は期せずして國家の産業交通の開發進んで全國民の利福増進を招來するものであることを私は深く信ずるものであります。さわあれ徳川幕政の折あの異數的實際政治家彼の二宮尊徳は私共に教へるに其事は極めて平凡でありますが彼れは其の平凡な理を以て庶民の向ふ道を示し赫々たる名聲を今日に遺したのであります。平凡なる真理之れを忽せに致してはなりません。故に私は此の平凡を忽緒に附せず華かではありませんが部分から全体の幸福へ！理論から實際への信念の下に地方の産業交通教育の完備と發展を期すべく微力を加ふるに淺學な自分でありますが強い信念を以て此平凡な真理の行進曲を強く而して高くこれを奏で此度選まれたる私の使命に對して出來得る丈明確にして満足なる解決を求め様と努力の二字に鞭ちつゝあるのであります。斯くして先輩祖先に依て植付られた地方産業交通教育に適當なる灌水と施肥との手数を怠らず努めて然して秋の天地の

彼の燎亂の錦と收穫が地方自治文化の上に強く實現さるゝ事を諸君とともに期待するものであります。將來とともに何とぞ皆様の御聲援を。

歸郷

谷中 岩 平 生

◆ 我が汽車の驛に着く頃雨はれて

田舎路 廣く陽の輝く

◆ 幼頃の思出深き山々の

あかづき近く我迎ふごとく見ゆ

◆ 久にして古里の家の縁に立ち

迎火焚きて母と語りぬ

◆ 亡き父の面影出する手植松

今日は淋しく白露を含む



現實に即して理想へ

「東白川郡」 吾 朗 生

凡ては血と、汗と忍辱の中から。

諸君は彼の美しく咲き出る諸々の花それは凡て黒き土より生ずると謂ふ事を御存じであらう。

然るに現代人は餘りに此の黒き土を醜なりとして省みない、何んといふ淺ましきだらう。然して徒らに美しき花をのみ憧れ求めんとはする、それ此れより誤れるはなし實に危き事ならずや、斯くの如き結果思想國難來が生じ、經濟國難來を叫ばねばならぬ様になるのだ。此處に於てか吾人は三千年來燦として日星の如き我國史に鑑みる時一大汚辱を感じ背汗三斗の思ひを爲す。

然れば吾人は此數年來所謂智識階級即ち國家の中堅を以て自ら任せねばならぬ今日の青年が一國の慣習。國是民族精神の因て來る所以を等閑に附し、徒

らに西歐の學に阿附迎合して呪ゆる新を遂ふに故に舊を陋なりとして省みず然して現實の問題に超然するを以て聊か得意とするの傾向あるは實に歴史ある邦家將來のために嘆すべき事であらねばならぬ。

彼等は自己が社會的に生存してゐる事の如何？を忘れたるかの如く春日茫として地を遂ふ夢有病者の如く然して自己の地盤を開拓するの苦惱を飛び越えて一躍新理想に就き武陵桃源の實現を夢見る其の愚實に憐むべし其れ「ローマ」は一日にして成りしものにあらずるを忘れ居るなり悲しむべし其の心事、實に悽むるの日早きを望むや切である。

新らしき社會、望む所の鼓腹扑讓の堯舜の樂園草民協和の樂土は決して一日にて來らず、あまた先覺者の血と汗の奔出なくして新社會への飛躍到達は不

可能である事を知らねばならぬ。現在の地上に於ては如何に博識多才の士と謂へども自ら更に努むる處なくしては一人の友、一人の同志も集ふものにあらす己れの踏む寸地尺土と謂へども皆努力と忍耐協力との所達である事を考へねばならぬ。

故に先づ理想社會への一疊更に本疊を奪取せむとするに於ては血の染む努力と燃ゆる様な奮闘心なくしては不可能である。

此處に於て吾人は新を學ぶと共に舊を棄てず新舊渾然たる融合を遂げせしめて、天地和合隨喜四才に漲り國民至樂の社會を此の地上に具現せしむるべく徐々に然して現實に即して理想の社會へと努力し様ではない？

美しい心からの協力團結然して努力とを以て……其れ黒き士は大衆の協合、恪勤に比すべく其の所産とも謂ふべき桃源の社會は句々たる春光に育ぐまれて咲き出でたる美花に比したい。然して望む小乗の世界から大乘の世界へ其れは大衆と共に動く事に依て我々が社會人としてより有意義な生活を齎らし得る事を念はなければならぬ。

郷土史蹟便り

—(會津の巻)—

松平節子姫で名高い若松!!白虎隊で有名な會津!!!然うした多くの人に強い印象を持つ會津若松、凡ゆる點に於て吾等の誇りである。

期くして世に喧傳さるるにいたつた會津の生立を探して見るのも滿更でもあるまい。

以上述べた外に笹に黄金が實るとかの磐梯山、猪苗代湖、それに翁島まつた五郎兵衛館等々數へ舉ぐれば限りないほんとうに有名な俺らが會津若松。其の會津と云ふ名は遠く崇神天皇の御代有名な四道將軍が東夷御征伐に派遣された時に北陸道に御向ひになられた大彥命と東海道に進路を取られた武渟阿別命の御二方が、たま／＼此の地に相會されたのが此の地名の始まりだそう、それで始めは相津だつたのがだん／＼傳へ傳つて訛り今日の會津になつたと傳へられる。

靜かに徐ろに、現實に即して新社會への飛躍を諸君とともに希ひ且つ實現に努め様然する事が即ち新らしき明日のある生活なのだから……「靜かに力強く進む汽車の音を聞きつゝ……」

勤勞の習慣を造れ

有益なる能力は、吾人の經驗によりて生ず、殊に勤勞の習慣によりて生ずること多し、故に國利民進の善良なる習慣は、吾人之を助成して不可なしと雖も、若し習慣にして不良有害のものならば、吾人は奮て其の發生を防止せざるべからず、而して既に行はるゝものに在りては、之を斷じて廢滅するに努めざるべからず。

是れ蓋し習慣なるものは、吾人第二の天性となり、一度入れば又抜くべからざる偉大なる勢力を有するものなればなり、故に吾人は自己の品性を高めんと欲せば、惡を避け善に移るの慣習を作らざるべからず、若し然らずんば如何に天性雄偉なるも、才氣秀絶なるも、終にはあはれ人外境に墮落するに至らんや必せり。

俺らが會津は四方に山をめぐらした天然の要害實に一將よく守る時は萬夫も容易に抜く能はずと謂ふ自然の要地である故に奥羽の豪族を牽制する絶好の地として文治五年源頼朝が其の功臣佐原義連を据えて奥羽目付場所となしたのである。之が今日歴史的に認められた初めなのである。

義連の孫光盛は華名姓に改め七代直盛は會津郡門田花黒川に地を有し城を築いた之れが有名な鶴ヶ城である。天正十七年廿四代連綿として續いた華名家は伊達政宗に亡され其後伊達、蒲生、上杉、加藤を経て寛永十二年保科正之が封せられてから明治維新まで松平家の領地となつたのであつた。

明治二年一時民政取締所を置いて會津藩は斗南に移封されたが廢藩置縣とともに若松縣となり明治九年福島縣に合併して今日にいたつたのである。

特に附記して置くが五郎兵衛館は年寄の御土産には最も好かれるあちらへ御立寄の際は是非御求めを……

縣人の誇り

一 記 者

我等の誇り、若き東京市長

堀切善次郎氏

異國にありては水上を行く唯の旅行者も此の地には都鳥とか呼ばれて京童に持囃さる、其れは往時の業平朝臣の古事、現時はエンジンの音渦巻く交通スビードの錯丈、凡ゆる文化と科學の母胎たる東京市!!! されば此の名を慕て萬人競ひ此處に集り亦萬物盡く此地より散じて宛然人体に於ける心臓の如き觀を爲す。此の大きな都市の『たばね』を爲すものの椅子を巡りて常に大伴の黒主と濱の眞砂の物語を想起せしむる。多くの歴史を包む此の不幸なる歴史に喘ぐ大東京市の回生の大國手として選まれたる若き市長堀切善次郎氏は福島縣信夫郡飯坂町の出身である。

其の飯坂と云へば古い郷土史と、然して他に優れた風景と温泉とを有し、福島縣の名所として第一に指を屈せねばならぬ土地だ。恐らく旅行をする程の人で飯坂を知らぬ人はあるまい。其の恵まれた土地的環境と長い歴史を有する名家に呱呱の聲を挙げられた堀切善次郎氏は隸達群を抜き既に囊中の錐、出藍のはまれを示し、明治四十二年東京帝國大學卒業恩賜銀時計組の一人である。卒業後直ちに官途に志し内務土木局長、東京府内務部長、一時東京市職務管掌として市政に參與大に手腕を認めらる。後復興途上の難路にある神奈川県知事に任せられ此處に日頃の蘊蓄を傾けて神奈川県復興事業に盡され、偶々復興局長官清野氏の死去するや拔擢されて復興局長官ともなり東京市長となる迄颯々として復興事業に

専念された。今や復興事業も完成の域に達し、氏又東京市長の榮職に就かる。氏今日の令名を贏ち得られたるは、日頃の倦ざる努力と衆に卓越せる才智敏腕、而して個性的徳望の然らしむるものとして、我等後輩否全縣人の尤も崇敬の念を深くし、範とするに足る。福島縣人として氏の如き英才を飯坂町が産んで呉れた事を諸君とともに他縣に誇りたい。

氏は齡四十六才、令兄に政友會の總務として盛名を馳せらるる堀切善兵衛氏有り、前途ます／＼洋々、將來大臣級の人物として充分の活躍あらんことを希望して已まない。殊に全國都市に範を示すべき大東京市長として幾多の先輩知名の士を抜き、然して京童の云ふ俺らが市長は大臣級であらねばならぬと事程左様に有名な難しい東京市のたばねに擡んでられた堀切さんを縣人として持った吾等は共に喜び其の名譽を御願ちしていただかなければならぬ。此の若くして前途ある市長堀切さんをして其の職に萬遺漏なく、以て有終の美を爲さしむべく我等福島縣人は舉て間接たると直接とを問はず、若き市長の健康と御奮闘を祈らねばならぬと云ふ事は豈に記者一人の

みではあるまい。

今や東京市は財政、土木、教育、社會事業、然して二百萬市民の重大問題として論議されつゝある瓦斯料金の引き下げ等々氏の犀利なる頭腦と尖鋭的な手腕に大いに期待されて居る。聞けば廳内の評判も宜しいとやら、重ねて御加餐を祈て擲筆する。

立志傳中の花形

佐藤盛二氏

刀圭界の最高學位を授與されて、昭和の御代の和らぎに喜びを包む佐藤盛二氏は明治二十九年十一月廿三日伊達郡川俣町字本町三河屋故佐藤ル子さんの子として産聲を挙げた。郷里の小學校を卒へるや氏は天涯孤獨の身を以て、殆ど苦學を續け刻苦精勵大正十四年慶應大學醫學部を卒業、次いで神戸傳染病研究所に入所し、患者の診療に従事する中、日本生命保險會社大阪支店長たる野呂洋氏に見出され、同氏の同情ある援助の元に一層研鑽を重ねて今度目出度博士號を授與されたものである。實に氏の如きは

立志傳中のひととして、後進の範として仰ぐに足る人
とせねばならぬ。同氏は大正十五年四月、青森市宇
米町柴田文太郎氏姪清子さん(三三)野呂氏の實子と
結婚し、夫婦の仲には玉の如き長女美代子さん(三ツ)
があり、目下京都市に一家を構へて居る。なほ同氏
大學在學中川俣町の大内源吉、武藤茂平、渡邊彌七
榎村萬吉、武藤叶助其の他陰に陽に後援を爲した事
として此の吉報に我事の様に喜び合へる實に美しい
話。此れも郷里美談として一異彩である。

近く博士號を授與さるる

佐藤宗三郎氏

高塵萬丈の都門を避けて螢飛ぶ、武藏の月を窓にす
る市外高圓寺九八五、醫學士佐藤宗三郎氏、君は將に
當年三十五才大正二年安積中學を卒業、進んで大正
六年第一高等學校を修業し最高學府たる東京帝國大
學を優等に卒業したる秀才、後本邦小兒科の泰斗唐
津博士並に阿部博士に就いて斯業を研鑽今日に及ぶ
其の功や報ひられて近く博士號を授與さるる筈。因

に氏の慶應大學病院に提出した博士論文は「過敏症
狀態に於ける副腎アトリナリン内分泌に就て」と題
するもので、過敏症に對する交換神經興奮藥の抑服
作用過敏症ショック發生機轉に關する研究である。
氏は福島市々長の愛婿である。温厚の士として評判
がよい。

◇機運が來たら身を投げだして物事に猛進し得る敢
爲の人なら、第一第二の機運を逸しても、第三第四
の機運に乗じてきつと成功する。身を捨ててこそ浮
む瀬もあれ。

杏林界の變り種

菅野利雄君

伊達郡針道の出身で刀圭界切つての仁俠菅野利雄君
小石川區白山御殿町に醫業開始以來十七年、孜孜と
して患家の爲に力を致されてゐるが、藥代を益と暮
れにしか請求しないと言ふから面白い。仁術として
昔時から通して來た杏林界に、兎角の噂ある此の頃
さりとて珍らしい事である、大いに斯界刷新のため

に強い實行力で範を示して貰ひたい。理由は簡單で
ある、自分も様々金錢のためには苦しむ経験がある
からだ。体験は人を玉にすか。

城北早稻田の名物

上石留五郎氏

田村郡中郷の出身、さすが河野磐州翁の血が流れて
居るものか清廉にして質實、事爲るも驕らず、常に默
々として斯業に勉めて居られ、近くにある早稻田大
學の校風と何か相通するものがある様だ。聞けば早
大及早稻田實業學校の校醫を兼ねて居られるとの事
尤もだと思つた、青年時代苦學研鑽の功を積まれし
人だけあつて、學生間にも評判よく、患者に對して
よく誠を致す故益々門前市を爲すと云ふ有様、昭和
出世美談の一として讀みたい。養嗣子は慶大醫學部
卒業、目下大阪に開業されて居るとの事。

西白河關平が生むた國手

上野貢氏

澄むた南湖の波上にボートを浮べた思ひ出を語る人
上田貢君、今では花の都のニコライ堂の鐘を聞きな
がら病者の心臓の動きに耳を澄ます。安積中學を優
秀で終へるや笈を負ふて東上、醫學を専攻、今は時
めく神田阿久津病院の副院長として納まつて居る。
斯道に掛けては人に一歩も譲らざる腕を持ち人に接
するや温なるが故に多衆よりはニコライの鐘の音よ
り強く響いてゐるといふから偉い。然して又同期生
には之れ君に劣らざる成功者が多い、綿糸業笠井秀
治君、東部電力庶務課長横田秀治君、早稻田の名物
で今度私學中から始めて高等試験委員に選まれた法
博遊佐慶夫君等々數へ切れぬ程ある、御互ひに肩身
が廣いと謂ふものだ。君やます、技圓熟、刀圭界
に力を致されて居る。我が福島のみならず、大日本
の國手として更に功礎あらんことを祈る。

家族と希望

人は家族なければ其の心定まらず、其の望
も定まらずして遂に國家人類の一大幸福を
欠くものと云ふべし。

郷土通信 信夫山放送局

會津電力鶴沼川發電所工事 愈々工事着手

會津電力株式會社鶴沼川發電所工事（南會津郡江川村田代地内）の起工式は去る六月十六日地方有力者約百名を招待午前十時盛大な賑入れを舉げた。

美しい土木組合の寄附

常に凡ゆる方面に活躍しつゝある若松市土木組合は此度市内各小學校奉安庫建設費に千圓の寄附を申出でてあつたのを學校の方は何とか出来るから目下再生の途上にある若松裁縫女學校の建設資金に寄附されたといふので交渉中一時組合長である金子總松氏の意見では不可能であると言明したが有志の盡力多數會員の意見も一千圓を五百圓つづ寄附した方がよいといふので十八日目出度手打となり解決を告げた。

川俣町長に功勞金

故川俣町長佐藤源吉氏に對する慰勞金贈呈問題に關する川俣町會は十三日午後三時より開會金五千圓を滿五ヶ年間に贈呈する事に決した。

大若松の喜び西若松驛 今月末竣工

近代都市文明の發達それは惠まれた交通網の完成からのみ生まれる此の經濟學上の原理は如何にしても否定し得ない。故に地理的に發展の機を與へられた都市は益々廣く發達を遂げ然らざる都市は加速度に凋落を餘儀なくされる、例へば維新後急速な發展を遂げた都市と淋れ行く封建時代の宿場とを見よ此の意味に於て俺が若松は非常に他の都市に比して優位な地に立つ。加ふるに愈々西若松驛が近く竣工する由まことに

心強い事である、市の發展に異彩を加ふるに違ひない。

二ツの停車場を持つ若松市その一ツ即會津線西若松驛昇降口の幹線道路が愈々今月一ぱいで完成、桂林寺新道、道場小路の各町を経て會津若松驛へと達するのだ。

今日此の竣工を見る迄には市民の幾多の努力を見逃せない故に近く此れが完成祝賀會を市公會堂で盛大に行ふ筈である。

雙葉郡

△双葉郡上岡村では去る二十二日午前十時より初村會役場樓上に開き席次の抽籤を行ひ過般の水害補助申請の件其他を附議した。

△双葉郡に於ける壯丁検査は七月二日より六日迄五日間富岡町公會堂に於て執行されるが日割及町村別人員左の如し。

△七月二日 大久村二六名 久之濱町三九名 廣野村五四名 木戸村三三名

△七月三日 龍田村四八名 上岡村四七名 富岡町五八名

△七月四日 幾世橋村二四名 長塚村二九

名 新山村四〇名 熊町村四〇名 大内村四二名

△七月五日 大堀村四二名 荊野村三七名 請戸村二八名 浪江町四四名 大野村一七名

△七月六日 津島村二十名 葛尾村二六名 總計人員六九三名との發表があつた。

△正直にまざる方便なし嘘は云はぬ方が身のため身の得大切な信用がつく。

全國大會の覇權を目指して

練習に勉む棚倉校野球チーム

若人の血を湧かしむあの蒼穹に飛ぶボールの胸をすく様な音！スポーツの中にも最も爽快味の伴ふもの其れはあの野球競技である其れが俺の郷里にも盛んになつて中央に進出して覇權を握らんものと一生懸命だといふから御互ひは運動界に肩身廣いと謂ふものだ中にも先年神宮外苑球場に全國少年野球大會の覇を爭つた棚倉小學校チームハ本年こそ其の榮冠を獲んものと必勝の氣運まじく練習に餘念がない殊に町の有志は後援會を組織し全國大會の機運とも謂ふべき福

島市に近日開催される大會に選手一同を激勵すべく非常な聲援振りである。殊に出發當日は全町民間より有志を募り、トラック數臺をもつて出陣することになり既に準備のため各委員は忙殺されてゐるとのことである。

縣下消防協會の地方代表 常任委員決定す

縣下消防協會の組頭大會に於て協會常任委員選定に就き如何なる人々が選出されるかは衆人に興味を以て見られてゐたが茲々此程決定左の如き發表を見た

- 一 梁川署管内梁川組頭 阿部長兵衛
- 一 福島署管内荒井組頭 加藤小左工門
- 一 二本松署管内松田組頭 山本堂博信
- 一 郡山署管内郡山組頭 今泉顯治
- 一 三春署管内移組頭 石井一二
- 一 棚倉署管内棚倉組頭 石澤寛一
- 一 石川署管内石川組頭 鈴木秀助
- 一 猪苗代署管内猪苗代組頭 原田小平
- 一 若松署管内若松組頭 星野喜一郎
- 一 喜多方署管内慶月組頭 蓮沼八右工門

一 田島署管内田島組頭 猪股龜八
一 植田署管内植田組頭 板本龜太郎
以上の十二名が委員として協會の事務を處理するのである。

猩紅熱郡山市を襲ふ

現今衛生思想の普及は各自の自覺をうながし殊に傳染病豫防には嚴重にも尚ほ一層の注意をして居た縣下に突如郡山市内に於て去る十四日市民の最も恐るる猩紅熱發生恐怖に襲れてゐる右は郡山市陸門田鐵道官舎宇田節子（三ツ）及び同市宇原田五十四番地奥服商小澤マサ（三ツ）の兩名である。

駒場出の農學士就職難から 厭世自殺を爲す

若松市中六日町酒造業宮森文次郎二男清次（三ツ）は本年三月駒場農科を卒業したが極度の神經衰弱に罹り自宅にて保養中十八日午後四時頃猶入らずを嚥下し自殺を計り同九時頃遂に死亡した尙同人は明年二月若松聯隊に入營する事になつてゐるが自殺の原因は健康を害し居る所へ就職難等も手傳て此

の悲劇を生むものである、ほんとにいやな世の中になつた

川俣町に社会民衆黨の支部設置

時代の波は山間までも襲て愈々輿論に認められて来た社会民衆黨では本縣川俣町に有志の懇請に基き支部を設置する事になり此程より種々打合せの所々々六月廿一日午後六時半より合川俣町民衆黨支部發會式を舉げた。

阿部磯雄さんの思想なり政策なりが、だん／＼地方的になつて行くのも楽しい。目撃したるかな川俣町。

東白河地方殘桑貫十錢臺で取引さる

東白河郡地方に於ける桑取引状況は貫當り十錢臺より二十錢止め臺値で行はれ居り、多く郡山地方に搬出されてゐる、既に約三千貫に達してゐるが此の現現象は霜害開際の掃立期であつた爲め極度の棄賣を見た爲再發芽に至らず今桑葉の過剰を來したと爲

めである。

二本松町

△二本松町大日本基督教會では六月二十日午後七時より新界の權威者を招き「阿彌陀佛より基督へ」と題する講演會を開催したが非常な盛會であつた。

福島市

本縣では去る六月二十五日福島市役所に於て福島文化住宅組合、信天住宅組合の監査を執行した。

若松市

△若松警署署長後任警署長 技師突戸祥介氏は十七日着任の挨拶に廻つた。
△會津高等女學校長より安積高等女學校長に轉任した小園清吾氏は十八日轉任の挨拶に十九日午前九時四十八分發で出發赴任した。
△修養園若松支部では二十日午後六時より第五小學校に於て常備講座を開き穴澤市長の「上水道と都市計畫」と題する講演があつた。

つた。

△若松市第四小學校児童後援會では六月十八日午後一時より児童の學藝會を開き盛會であつた。

樂翁公百年祭に御下賜金

故白河藩主松平樂翁進いて本年は丁度百年忌に相當するので其の命日に當る去る六月十四日は兼て翁の徳を慕ふ淺澤榮一子爵を會長とする樂翁遺徳顯彰會では午前十時から深川區靈岸島にある靈岸寺に於て百年忌を営むだ其折衷くも富中に於てせられては十一日祭料として金三百圓御下賜に相成た同會では記念事業として公の傳記を編纂するとともに墓碑の修理を爲す筈である。

根本氏の有志招待會

郡山市會議長として又貴族院議員として令名隠れなき根本祐太郎氏は六月八日市會終了後市會議員並に市長各課長を棋亭熱田家に招待し市會議長就任の披露宴を張つたが頗る盛會であつた。

新に托兒所が出来た

選した。

石城郡澤渡村議選舉戰

石城郡澤渡村々會議員選舉は六月五日前六時から午後三時迄の間に同村役場に於て執行總有権者二百六十六名(定員十二名)立候補者十五名にて白熱的競を争つた。

福島縣市町村會議員 (一)

福島市

藤卷 榮作 半谷 眞雄
佐藤 元治 佐藤 和右衛門
田子 健吉 加藤 嘉兵衛
大原 重吉 山口 兼次郎
木村 好次郎 半澤 喜右衛門
神岡 好次郎 松江 登里男
及川 林吉 北川 次男
吉田 吉郎右門 松本 忠雄
黒澤 松五郎 岩井 賢太郎
富山 政次 大沼 孫之助
油井 徳藏

菊田 保吉 吉井 廣吉
高木 嘉助 淺井 儀一
佐久間 忠作 藤橋 大太郎
紺野 重吉 西形 吉次郎
岩瀬 郡長沼町
矢部 眞二 二瓶 徳太郎
佐藤 優司 深谷 嘉重
森岡 喜一郎 柳沼 徳藏
八木 沼寅之助 渡邊 歳次郎
安田 安之助 車田 忠次
赤羽 彌作 森 正義
西白河郡小田川村

鈴木 茂 荒川 春吉
鈴木 新作 小山田 長藏
小河 信次 大越 萬次郎
十文字 積善 吉田 廣之助
菊地 吉之助 長谷川 高樹
星 六五郎 小山田 梅吉
西白河郡白河町
田中 増次郎 星野 林八
鈴木 義臣 小針 善兵衛
田村 洋策 河島 耕作
吉田 周策 竹田 益平
中村 市太郎 吉田 金次郎
須釜 政吉 皆川 龜之助
室井 力丸 渡部 泰次郎
安田 忠次郎 眞船 廣吉

益田儀一	吉田豊吉	佐々木太郎次	長谷川源太郎	高玉章	荒政衛
岡本茂三	加藤鬼太郎	押部直平	角田弘吉	島木政雄	四栗米八
福田春三	山本長三郎	王井琢磨	黒田弘平	相馬飯盛村	佐藤博信
吉田虎之助	藤田新次郎	押下芳久	阿部寅一郎	荒島政	
五十嵐重藏	鷺尾多四郎	大沼郡永井野村	立川金太郎	鎌田正二	菅野忠雄
鈴木常吉	後藤實佐	原田種信	新津久次郎	青田一	佐藤吉光
小出常吉	大谷鶴吉	眞智歳七	小島久吉	渡邊忠	船橋俊藏
西白河郡須釜村	石森松吉	永峯仙重	同嘉平	山田市太郎	橋本源次郎
小原鶴次郎	瀬谷汎良	白井榮一	菊地一	石城郡入遠野村	荒濱治
大木吉成	大野徳藏	齋藤長太郎	白井久右工門	鈴木爲吉	平子庄太郎
相樂良次	塩田徳藏	仙波太一		同長太郎	平子春吉
大野梅吉	小針作次	相良良藏		吉田孫次郎	上遠野實雄
柳枝隆三郎	鈴木爲作	塩谷徳藏		渡邊林之助	折笠春吉
森只義	鈴木茂吉	大木吉成		小澤正治	佐藤魚三郎
西白河郡釜子村	鈴木錦之助	瀬谷吉成		野藤壽	阿部直衛
佐藤元	鈴木茂吉	神拔龍三郎		野山藤吉	草野直造
藤田米吉	鈴木錦之助	窪田仁治		佐藤眞衛	草野倉造
大谷五三郎	鈴木錦之助	荒榮四郎		草野眞衛	佐藤喜吾
穂積廣	中根覺治	窪田仁治		草野眞衛	加藤八次
邊見久右工門	佐川泰三	窪田仁治		草野眞衛	
齋須永治郎	光之助	窪田仁治		草野眞衛	
大沼郡川口村		窪田仁治		草野眞衛	
坂田音松		窪田仁治		草野眞衛	

戀慕の人質

矢間忠良



肥後と筑後の國境を走つてゐる山脈が、やがては不知火の燃ゆると謂ふ有明の海邊に到く處に靈峰九重山が屹然として聳えてゐる。その頂上に、白鶴が翼を擴げた様に廣々と城塞を築いてゐるは、元龜天正、所謂戰國亂陣の世に西國の雄として誇つてゐた九重三郎忠任と云ふ、此の地方の豪族だつた。時は春三月——城庭の櫻は爛熳と咲き亂れてゐる。全山は濃き緑に包まれて、その中腹には、天女が残して去つた様な薄絹の舞衣と見誤ふ霞までも引いてゐる——。

「喃、光行さま、それは餘りに情無い御言葉で御座りまする——」

山の麓の普門寺の庭に咲き誇つてゐる老ひ櫻の根元に立つてゐる一對の若き男女——。

遠目に見れば、當さに一幅の繪巻物を見る様に鮮かな彩色を施された様な場面である。

若武者の名は、左近光行、當年十八才になる城主忠任の一粒種——父忠任の強つい容姿に似ず美貌に恵まれた様な容姿ではあるが、眉宇の間に閃めく精悍な氣性は、十五才の初陣に、甘木城を攻めた時、若殿乍らも敵の兜首六つも腰に着けて父忠任からその武勇を喜こばれた程だつた。

男を怨ずる様に言つた美少女は、肥後の國八代ヶ嶽に城を築いてゐる八代入道道雲が愛娘、千里姫、未だ十六才の花の蕾を父入道が忠任に降伏してから人質として送られてゐたが、何日かは光行と二人——人目を忍ぶ戀仲となつたのである。

「姫、光行の心も察して呉れ。其許の父入道殿の此

の度の反逆——例へ世は戦國とは言へ餘りに武士道を重せられぬ致方ぢや——、まして當城には人質として預り居る其許がある筈ぢやに、事もあらうに附近の鼠賊共を煽動致して當城に迫るとの注進ぢや——諦めて呉れ——其許の父入道殿は其許を犠牲とする積りぢや、」

道雲が反逆の旗を擧げた注進を得た時、忠任は烈火の如く怒った。

「憎つくき賣僧めが、身の程知らぬ程があるわ、今度こそは入道首、胴には着けて置かれぬわい、——まして愛しき娘を送り乍ら、見す／＼見殺しと致す心底ぢやな——武士の風上には到底置けぬ代物ぢや、其儀なれば當城まで寄せ付けず、長州驛に迎ひ討て……」

速時斷行が忠任の戰畧だった。

一年此方、血に餓えた諸將諸卒は躍り上つてその命令を受けた。

「すわ戦ぢや、高の知れた入道が勢、長州驛の浦川を血で染めてやらうぞ……」

だがその中でも光行の顔は暗くなつた。

「千里姫を軍神への血祭りにせい……」

夏の夢三題

假宅にて 柳 緑 花 紅

夢の一

俺は阿母おははともう一人誰だったか(？)兎に角三人で海岸をふらついてゐた。海岸の其處はかなり入江になつて居る。尤もそれでも兩方の堰堤の間はかなり廣いには廣かつた。

その時干潮であつた。

俺等は水の流れに叛ひて歩いてゐた。

折しも對岸の砂洲の上に二人の裸体が現れた。勿論地から湧いたのでも天から降つたのでもない、唯俺には氣がつかなくつただけの事である、

一人は遠眼にも身丈も高く筋肉も隆々たる様に頑健な体格は言はずと知れた男である。身丈の低い方はなめらかな皮膚、優美な曲線美、色は白く、腰は細い、先づ女とも見られた。

二人は堅く抱擁し、接吻した然も二度、且三度。

父忠任の命令は最早、如何にする事も出来なかつた。

「人質との戀——あゝ、この躬みづかは……」

出陣を目の前に見て光行の心は迷つた——。

「父上に願つても到底、千里の命は救はれぬのぢや、一層の事、我手に懸けて千里を刺して後、戀の償かたひに我が躬も潔きよき良よく自決致すか」

光行の精悍無比な氣性も戀には弱かつた。

「そうぢや、一層の事、千里を連れて當城を立去るか——いや、それも到底出来ぬ事ぢや、領内は十里四方ぢや、追手が掛るは必定ぢや、あゝ——この躬は——戀の爲めには斯程の苦しみをする。父上はいや、入道殿の仕打が怨めしいわ……」

光行の心は道雲入道を呪ふ聲が漲つてゐた。

——一陣の風が吹いて落花が亂舞する。

「喃、姫諦めて呉れ、躬は如何すれば良いか解らぬわ、到底其許の命は救からぬのぢや、ぢやが——光行も、せめて其許への償かたひには長州驛で討死と決めたのぢや……」

悲痛な決心を千里に明あした光行の兩眼からは熱い涙が滲み出た。(つゞく)

洲の上に堀立小屋がある。

小屋の影から現れた二人は又水も洩らさじと抱き合つて水中に投じた。

『身投げだ！』

二人の影が水中に現れた。二人共坊主頭の男だった。

二人は波の間に／＼姿を消した。

夢の二

其の日は殊の外曇つて天候は險惡であつた。

その海では水が非常に増えてゐた。

俺等は渡船に乗り込んでゐた。

渡船は激流の爲にとすると流れそうになる。

俺等はかなり急いでゐたらしい、氣短かな俺は冷い水中に飛び込んで一生懸命船を引いて行つた。二三の乗客の喜ぶ顔が意味もなく眼に入る。

對岸に着いたのは何時のことか、何處で何うして着物を着たか？

兎に角俺は何時の間にか對岸の堤防の上に立つてゐた。

俺は海面に眼をやる時郷里が懐しく胸が躍つた。

それでゐながら、反対側を見る時、あるべき田もな
く、畑もなく唯草茫々たる荒原で處々一軒宛の家が
立つてゐる。

もう夕暮だ、薄闇の色が迫つて来た。
俺等は急ぎ足に堤防を下つて行く。

途中でバツタリと兄にあつた。

『兄さん！ 歸りに兄さんの家に寄つて今夜は泊めて
貰ふよ』と俺は懷しさに躍り乍ら言つた。

『あゝ、いゝとも』と兄の聲は女のやうにやさしい

『兄さん！ 義姉さんは歸つて来たかい』

『いゝや、俺一人だよ。では歸りに寄つて行けよ』
と聲は遠ざかる。

兄の姿は寂しかつた。

『兄さん！』と俺は心の中で呼んだ。

『かういふ日暮、兄さんはどんなにか寂しく思はれ
るだろう。』

俺は眼頭の熱くなるのを感じ乍ら、とぼ／＼歸り
行く兄の姿を何時までも／＼も見送つてゐた。

是から 夢の三に移る。

其の以前に何んなことがあつたか知らない。

其處が何處だつたか、兄貴と一緒に来た二人が誰
々であつたか、そして彼等が何事を語り合つたか：

……すべて忘れた。
兄貴が俺を介抱してゐる。その兄貴も力なく弱々
しい。

俺は兄貴よりもつと憐れな人間になつてゐた。
身内に何處といつて悪い處もないが、唯頭がボン
ヤリしてゐる。

所謂「痴呆症」とでもいふのであらう。

白痴のやうになつた俺は意味もなく兄貴の衰へた
姿を見守る。

兄貴の寂しい顔が俺の身を案じてゐる。

電燈の光が急に明るくなつた……

其處で俺は眼が覺めた。

（あゝ、今のは夢だつたか）

喜びともなく、悲しみともなく、夢中の我が姿を
回想する。

（人一人生きることが辛いものだなア）

儚ない笑顔が眩しい微笑を浮ぶ。

「夢となく現となくみる我が心」

謹啓 折角諸賢の御英業に對してかうした感傷的な夢物語を書き申
譯もありません。然し先輩某氏の懇望と難く執筆の次第で御座
います。幸に諸賢の御側笑を得ば幸甚の至りと存じます。
最期に御誌の御隆昌を祈つて止みます。

科學欄



◇ 小さい科學

蠅と蜂。蠅と蜂の繁殖力はすばらしいものであります。一匹の蠅が一回に百の卵をうむとして、其の半分が雌と見て、一年に十回の發育をくり返すと見ますと、次の驚くべき数になります。

五十の十乗、即ち一八五〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇といふ實に大變な数字を示す事になります。此の世の中然して御様はよく作て呉れました。それはよく出来たもので自然はこれを淘汰してゐます。皆様が蠅の幼蟲を瓶に入れて置くときつと蜂の幼蟲が生れて来るのを見るでせう、あれは小さい名のない蜂が蠅のさなぎの中に卵を生むやがて時季が来ると蜂の子が生れ其の蜂の子が蠅の幼蟲をたべてしまふからであります。

何んと自然の働きは偉いものではありませんか。

◇ 酒と病氣

近頃の研究に依りますと、酒は吾々が享けた貴重な血精の免疫を破壊するもので假りに十五貫の人が日本酒四分の一合を飲む場合其の人の血精の持つ免疫力は傳染病者に對してひどく減ると云ふ事でありました。また免疫に關係の深い白血球即ち白血細胞も少しのアルコールで大いに減少しました。白血球も崩壊され易くなる從て病氣豫防の目的で酒類を用ふる事は安全の策ではないとされてゐます。酒の勢ひで病氣を治すといふことは不可能といはれてゐます。

◇ 動物の冬眠

動物が冬眠をとつてゐる時はその活動能力は非常に低下し、殆ど中止してゐるかの様に見える、その心臓の鼓動は平常時一分間二百から、三百五十が普通であるのに冬眠期には僅かに五乃至十五となる。呼吸も殆ど停止せざるに近く、僅かに二分間に一回の呼吸をなすものである。體温もそれに伴て低下し氷點以上二度乃至三度に過ぎない重量も平常時の四十パーセントを失つて了ふのである。

◇ 世界最大の蓄音機

米國の或る大きなビルディングの屋上に取付けられてある蓄音機は、其の高さ約三、六呎幅二十二呎奥行十六呎からある世界最大の物で宛ら巖頭に立てる人の獅子吼を思へ行人の眼を驚かしてゐる。其の下部には強力な擴音器が取付けられてゐるのである。はく血涙の境地を滑り始めて勝利への道を指すものである。

◇ 油虫と介殼虫の驅除法

花が散て葉が出る、其の嫩葉を冒して植物

の發育を侵害する油蟲と介殼蟲に就いての驅除法を説きます。アブラ蟲には鮮綠色と赤色とあり殆んど年中新芽を喰ひ荒し殊に春の新芽や花芽に寄生して害を與へますので之れを驅除するには藥劑散布は無論必要有効であります。が蔓延の豫防策として日光の透射と通風とをよくする事が第一であります。油蟲はごく弱く、から除蟲菊加用石鹼合劑の五十倍液ですぐ倒れます。次に介殼蟲は背に白い介殼を被り片一方にだいたく色の斑點があり年二回發生し第一回の雌蟲は七月上旬飛廻り第二回は十月下旬受情して雌蟲の状態を越冬し翌春四月末産卵いたします驅除法はかへる時期に固體松脂合劑を水一斗に四十粒をこかして撒布するのが最も合理的な驅除法とされてゐます。

◇ 石油乳劑の

作り方と使用法

最近害蟲退治の劇王と稱されてゐる石油乳劑は如何にして作りどんな方法で使用するにやいでせうか。
抑も石油乳劑はアブラ蟲、キジフミ、ウン

カ、介殼蟲の如き吸收害蟲をしやく害蟲に屬するイモムシ、ケムシ等の害蟲に對しての模範的殺蟲劑だとされてゐます。そしてその原料と割合は左の通りです。

△石油(燈油)五升 △石鹼(洗濯石鹼)六十匁 △水(熱湯)二升五合 右の様な原料が揃ひますと先づ石鹼を細かく削てバケツか桶に入れそれに熱湯をそそぎ然してよくかきまわしながら十分に融かし次に石油を加へて數分間よくかきまわします、繼で液が乳の様になり粘り氣を帯びるまで續けて行ふ。斯くして出来たのを乳劑の母液といひます。之れを使用するにはこの母液を更に水で薄めて使用するのですが其の割合は原液五倍半乃至六倍の水(冬期は二倍半内外)を加へて使用に供するのです。

乳劑を作る時注意すべきことは軟水を用ひなければならぬこととそれは雨水がよく若し硬水だつたら曹達か或ひは苛性加里または灰を加へ軟化したものを使ふ事であり。また乳劑の使用に當て石油硫黄合劑(介殼蟲の殺蟲劑)との混用は禁物である事を考へて置かなければなりません。

吳下の阿蒙にあらず

(三年たてば三つになる、何時でも坊ちゃんではない)

吳の國の呂蒙は、孫權から勧められて始めて學問に志した。彼の努力は尋常でなかつた。そして彼は倦むことを知らなかつた或る時、古くからの知合であつた魯肅が久しぶりで訪ねて來て、色色彼と論議した。彼の識見の意外に立派なのに驚いた魯肅は、彼の肩を叩いて、『君は武邊一方の男だと思つてゐたのに、近頃君の博識には驚いた。もう舊の「吳下の阿蒙」ではないわい。』
呂蒙はニツと笑つて、『男が三日別れてゐたら、どんなに變るか、目を刮いて待つて、よいさ。』

福島縣人會々則

第一章 目的

第一條 本會ハ福島縣人ノ親睦ヲ圖リ併セテ内外呼應シテ郷黨互助ノ實ヲ舉グルニアリ

第二章 名稱及事務所

第二條 本會ヲ福島縣人會ト稱ス

第三條 本會ハ本部ヲ東京市ニ置キ支部ヲ縣内外主要都市ニ置ク

第三章 事業

第四條 本會ハ其ノ目的ヲ達センガタメニ、雜誌『福島春秋』ヲ發刊シ併セテ左ノ事業ヲ行フ

- 一、春秋二季ニ於テ縣人會ノ親睦會ヲ開ク
- 二、各種講習會及講演會ノ開催
- 三、模範縣人ノ表彰、就職並ニ縣物産ノ紹介

第四章 會ノ機關及會員

第五條 本會ニハ會長、副會長及顧問、幹事若干名ヲ置ク

第六條 會長副會長及顧問ハ本會ノ推薦ニ依ル

第七條 幹事ハ本會ノ互選ニ依ル

第八條 會員ヲ別テ名譽會員 贊助會員 正會員トス

一、名譽會員ハ一時ニ壹百圓以上寄附シタルモノ

二、贊助會員ハ毎年拾圓ヲ齎出スルモノ

三、正會員ハ毎年金貳圓四拾錢ヲ齎出スルモノ

第五章 雜則

第九條 本會ノ維持ハ誌代會費及其他ノ雜收入ヲ以テ之レヲ行フ

第十條 會員ニシテ住所氏名ヲ變更シタルハ新舊住所氏名ヲ併記シテ本會ニ通知スベシ
第十一條 會員ニシテ己ムラ得ザル事故ニ依リ退會セントスルハ事由ヲ附シテ通知スベシ

編輯後記

大空に一聲高く雲雀鳴く。萬物縁に包まれ世は夏だ。縣人の融和と吾人相互の向上而して大福島建設の目標の下に企てられた縣人會機關誌「福島春秋」の創刊が大方諸賢の援助と御後援に依りこゝに呱呱の聲を擧げ得た事を深く同人一同感謝致して已みません。

編輯に先だつて何分未經験なものですから計畫發表以來多くの時日を経、幾多御贊助の皆様に申譯ありませんでした。遠くから御詫び申上ります。

生みの洗禮、創生の懐み、多くの難に打勝て起つた此の「福島春秋」決して富者の倦怠の欠伸の中から生れたものでなく政黨の走狗となつて文壇に筆を投じたものでもありません。眞實に若い熱と他縣に今日凌駕されんとしつゝある縣人會の不振に目覺めて非才及ばずと雖も多少裨益する所あらばと同人が起つた譯であります。何とぞ過去に於て經驗の夥き若人の此の計畫、皆々様

何分の御鞭達と御叱聲の上力強く長く此の地上に福島春秋誌の成長する様施肥と耕耘の機を與へられん事を。

△次に誌面の關係で創刊號に寄せられた原稿を掲載し得なかつた事は申譯ありません御宥し下さい。

△次號からは誌面の充實と縣人會の使命に向て實行の歩を進めんと致して居ります。十二分の御授けを御願ひ致します。

編輯部

「機關誌福島春秋」

投稿規定

修養談、縣内名所、名物、其他時事の出来事

論説（題隨意廿字詰）編輯同人選

縣内及東京の方とを問はず御自由にござし御投稿下さる事を望むで已みません。

宛名は

福島縣人會「福島春秋編輯部」

~~~~~

| 冊数  | 定價     | 郵税  |
|-----|--------|-----|
| 壹冊  | 金貳拾錢   | 金貳錢 |
| 六冊  | 金壹圓貳拾錢 | 郵税共 |
| 十二冊 | 金貳圓四拾錢 | 同   |

外國行郵税は一冊に付金四錢 但本邦郵便局所在地を除く

△御注文は前金の事

△御送金は替爲が一番安全です

△郵券代用は必ず一割増しのこと

△廣告は申越次第社員參上御便宜に取扱ひます

昭和四年七月五日印刷（第一卷第一號）  
昭和四年七月十日發行

東京府千駄ヶ谷八七七

編輯兼

發行所

青 砥

勇

印刷所

福島縣人會印刷部

東京市本所區相生町五ノ三八

發行所

福島縣人會

電話本所三四七四

# 祝 創 刊

◆迅速〓低廉〓美術〓を

「モットー」として特に縣人の御用命を歓迎!!

共成印刷合名會社

矢 浪 清  
小 浦 軍 一

東京、神田、三崎、三ノ一  
電話九段二七二一番

祝 創 刊

秋山乾英師編  
佐藤中將題字

「サツク入美本」 定價 金參拾五錢  
送料 金 四 錢

「神の御聲と梅陀羅の子の叫び」

神の御聲の如何に美しく梅陀羅の子の叫びの  
如何に正しきかを本書に味はれよ。

東京市神田區三崎町二ノ二

發行所 振興社出版部

振替口座東京五六一四二番

祝 創 刊

◆懇切ト勉強ハ弊社ノモットー◆

會 津 屋

(芝區白金三光町三八五)



石 田 洋 服 店

旭進會事務所

特ニ縣人ノ御後援ヲ乞フ  
御一報次第參上致シマス

新時代の先驅者

# ユニオン壘詰生ビール

まぐすだれ

御中元の御贈答には

是非本社發賣の

ビールの泡や

壘詰生ビールを

タすゞみ

御進め致します

宮内省御用達 日本麥酒鑛泉株式會社